

エコツーリズムという概念に対する一考察：マス ・ツーリズムとの共生関係へ向けた視点から

著者	安福 恵美子
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	23
ページ	101-109
発行年	2001-09-05
URL	http://doi.org/10.15021/00002086

エコツーリズムという概念に対する一考察： マス・ツーリズムとの共生関係へ向けた視点から

安福 恵美子

(阪南大学国際コミュニケーション学部)

A Study on the Concept of Ecotourism: From the Perspective of a Symbiotic Relationship with Mass Tourism

Emiko Yasufuku

(Hannan University)

エコツーリズムは、近年における自然環境に対する関心の高まりを背景として、マス・ツーリズムのネガティブなインパクトに対するものとして登場した。エコツーリズムは、自然とツーリズムとの密接な関係性を示すが、その捉え方が主体によって異なるため、エコツーリズム概念は多様性をもつ。本稿においては、「ソフト型」と「ハード型」に分類されるエコツーリズムの定義に関する先行研究を基に、マス・ツーリズムとの共生関係へ向けた視点から、エコツーリズム概念に対する考察を行う。

A variety of the definitions have been given to the term 'ecotourism', which has received much attention in recent years because of the increased recognition of, and reaction to, the negative impacts being caused by mass tourism to natural areas. This paper shows the idea that ecotourism can be divided by two types, 'hard' and 'soft' and analyzes 'soft ecotourism' from the perspective of a symbiotic relationship with mass tourism.

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 差異化されるエコツーリズム | 3. マス・ツーリズムとの共生関係 |
| 2. エコツーリズム概念をめぐる動き | |

Key words: ecotourism, mass tourism, soft ecotourism

キーワード：エコツーリズム、マス・ツーリズム、ソフト・エコツーリズム

1. 差異化されるエコツーリズム

近年、さまざまなマスメディアに登場するエコツーリズムに対する言説は、エコツーリズムをマス・ツーリズムの対極に位置づけたものが多い。そこでは、マス・ツーリズムが「計画不足」であり、「コントロールされていない」のに対して、エコツーリズムは「適切な計画」が行われているため、「自然及び文化遺産の保全を行っていくための一番強い手段」⁽¹⁾と謳われる。さらに、観光客と地域住民の接触する機会が少ないマス・ツーリズムに対して、エコツーリズムは地域文化を理解し、地域住民との接触を重要視する点が強調される。このような、エコツーリズムに対する言説は、1980年代の後半、エコツーリズムという用語が自然環境に対するマス・ツーリズムのネガティブなインパクトに対するものとして登場したことに起因する。

マス・ツーリズムとの対比という点からみれば、これまで多くのツーリズム形態が登場している。エコツーリズムを提唱する自然保護団体⁽²⁾は、エコツーリズムに関わりをもつ用語は35にも及ぶことに触れ、その中でよく知られているツーリズム形態として、自然観光(nature tourism)、自然との触れあいを重視したツーリズム(nature-based or nature oriented tourism)、大自然観光(wilderness tourism)、アドベンチャー・ツーリズム(adventure tourism)、グリーン・ツーリズム(green tourism)、オルタナティブ・ツーリズム(alternative tourism)、サステナブル・ツーリズム(sustainable tourism)、適正観光(appropriate tourism)、自然と触れ合う休暇(nature vacation)、スタディ・ツーリズム(study tourism)、学術観光(scientific tourism)、文化観光(culture tourism)、ロー・インパクト・ツーリズム(low-impact tourism)、アグロ・ツーリズム(agro-tourism)、ルーラル・ツーリズム(rural tourism)、ソフト・ツーリズム(soft tourism)を挙げている(Ceballos-Lascuráin 1996:21)。そして、消費型マス・ツーリズムに対するオルタナティブという点において、これらの名称は共通点をもつが同意語ではないことを強調している。それは、自然保護に直接的に関わらなければエコツーリズムではないからであるという。

さらに、自然観光とエコツーリズムの相違について、前者は観光客個々人の行動や動機に基づくものであるのに対して、後者は地域社会が目指す目的を達成するための計画的アプローチに基づく広義の概念として捉えている(Ceballos-Lascuráin 1996:22)。このように、両者の違いを自然保護に直接関係があるかという点からみた場合、「大自然観光」や「冒険旅行」などに含まれるような、トレッキング、登山、ラフティングなどの活動はエコツーリズムには含まれない。それは、「これらの活動によって自然に対する観光客の理解が深まったとしても、自然に対する人々の賞賛は必ずしも訪問地の自然保護に役立つとは限らない」からである(Norris 1992:33)。

たとえば、世界観光機関が自然観光とエコツーリズムという用語を互換性をもつものと捉えているように (World Tourism Organization 1992), エコツーリズムという用語は一般的に自然観光を指すものとして使用されることが多い。しかしながら、自然資源の保護につながらないツーリズムはエコツーリズムとは呼ばれないことが強調される言説において、エコツーリズムは自然保護という目的を明確にもった新たなツーリズム形態として他のツーリズム形態と区別される。

このような立場において、「エコツーリスト」は「普通の旅行者」と区別され⁽³⁾、「エコ・ツアー・オペレーター」と「普通のツアー・オペレーター」を区別することが要求される⁽⁴⁾。さらに、オペレーターが区別されるように、「エコツアーガイド」と「観光ガイド」も区別される⁽⁵⁾。そして、さまざまな機関によって作成されるエコツーリズムのガイドラインやツーリスト・コードは、「普通のツーリスト」を「エコツーリスト」に変えるための装置として存在するが、そこではツーリストの行動は制限的に捉えられている。

エコツーリズムは他のツーリズム形態と差異化されることによって、ツーリストに対して特別なエコツーリズム経験をつくりあげている。それは、「エコツーリズムの最大の目的は『自然保護のために自分に何ができるか』を旅行を通して考える点にある」⁽⁶⁾というエコツアー参加者の声にみられるように、環境教育としてのエコツーリズムの特性を示している⁽⁷⁾。

2. エコツーリズム概念をめぐる動き

エコツーリズムはさまざまな要素によって成り立つ⁽⁸⁾。そのため、主体によって捉えられかたが異なることは、エコツーリズム概念の多様性によって生じる混乱に対する指摘にみられる⁽⁹⁾。前章でみたように、環境教育的な面を強調する自然保護団体やエコツーリズム協会などの機関によるエコツーリズムの定義は、地域社会の持続的発展という点に重点を置いたものが多いため、地域振興を含むエコツーリズムの定義がプロモートされる傾向が強い (Campbell 1999)。そこでは、エコツーリズム、地域振興、環境保護という要素間の関係性が重要とされる。

エコツーリズムは、近年における自然環境に対する関心の高まりを背景として、自然とツーリズムとの密接な関係性を示すものである。しかしながら、80年代以前から存在していた自然観光において、すでにエコツアーが行われており、現在広く使用されているエコツーリズムは、その用語や定義によって突然発生したわけではなく、その必要性に呼応したものであるという指摘 (Fennell 1998)⁽¹⁰⁾には、エコツーリズムが社会現象として捉えられる必要性が示されている。

一般的に、批判的な視点から描かれることが多いマス・ツーリスト像に対して、エコツアーに参加するツーリストは、環境保全に対する意識が高いというレベルが張られることが多い。しかしながら、近年、環境に対する関心がツーリストの目的地選択に大きな影響を与える (Ayala 1996:50) など、一般のツーリストの環境に対する意識が高まりつつある。

自然をアトラクションとするさまざまなツーリズム商品が環境に配慮したものになっていくなかで、一部のエリート層を対象としたツーリズムとして批判されることが多いエコツーリズムが、もはや「エリート・ツーリスト」だけのものではないことは、市場の拡大によって示される⁽¹¹⁾。さらに、「ソフト・アドベンチャー・トラベル (soft-adventure travel)」とも呼ばれていたエコツーリズムが、太平洋観光協会 (PATA) 主催による「アドベンチャー・トラベル」の会議名称に 1992 年に付け加えられたことは、エコツーリズムとアドベンチャー・ツーリズムが統合されつつある状況を示すものである。

エコツーリズムに関しては、レジャー活動としてのツーリズムという視点から語られることが少ない。しかしながら、人間中心の活動としてエコツーリズムを捉えた場合、エコツーリズムは他のツーリズム形態と差異化された特別なツーリズム形態ではない。そのため、エコツーリズムという用語を広く捉えることによって、他のツーリズム形態との関係性について考察する必要がある。

3. マス・ツーリズムとの共生関係

積極性 (active) と消極性 (passive) という両極の連続性においてエコツーリズムを捉えた研究 (Orams 1995) をもとに、エコツーリズムとマス・ツーリズムの共生関係について考えたウィヴァーは、エコツーリズムにおける積極性と消極性という二面性をつぎのように捉えている (Weaver 1999)。前者は自然保護に積極的に関わることを目的とした狭義のエコツーリズムであり、ツアー参加者が限られた宿泊施設を利用することによって、比較的長期にわたって自然に深く関わるツアー形態をとる。一方、後者は、当該地域における自然及び文化に対してネガティブな影響を与えないような活動を指す。自然保護に積極的に関わる前者に対して、後者は資源の現状維持という意味合いが強い。さらに、後者は当該地域における滞在が短く、使用される宿泊施設も一般客用であり、エコツーリズムが全旅程の一部である場合が多い。

消極的特性をもつエコツーリズム形態に注目するウィヴァーは、80 年代から自然保護団体をはじめとして提唱されてきた、自然保護を促進することを目的として掲げられたエコツーリズムの定義には、このようなエコツーリズムの消極的な面が考慮されていないと指摘する (Weaver 1999:793)。ツーリズムを大きくサステイナブル (持続可能性) とアンサステイナブ

ル（持続不可能性）の二つに分類した場合、マス・ツーリズムの一部はサステイナブル・ツーリズムに入ると考えるウィヴァーは、エコツーリズムとマス・ツーリズムの関係について、異なるタイプのシナリオを呈示している（Weaver 1999:810）。そこでは、エコツーリズムとマス・ツーリズムの関係は、持続可能性があるかを基準として分類され、マス・ツーリズムの一部にエコツーリズムが入ることによってマス・エコツーリズムが持続可能性をもつツーリズム形態として示される。一方で、動植物の紹介が物珍しさを中心として行われたり、地域社会との接触の方法が不適切であるようなエコツーリズムは持続可能性をもたないマス・ツーリズムに入る。それは、エコツーリズムをマス・ツーリズムとオルタナティブ・ツーリズムという両方のツーリズムに組み込まれる柔軟な特性として捉えるからである。

このようなエコツーリズムに対する考え方は、エコツーリズムを「ソフト型」と「ハード型」の二つに類型化することによって、ソフト型エコツーリズムとマス・ツーリズムの共生関係を探るものであり、エコツーリズムがマス・ツーリズムの一要素となる可能性を示すものである。このような視点からエコツーリズムを捉えた場合、アヤラ（Ayala 1996）によって示される「リゾート・エコツーリズム」の考えかたは、エコツーリズムのチャレンジ性という点において注目される。それは、現在行われているエコツーリズムの多くが自然保護地域において展開されている状況に対して、破壊されやすい生態系をもつ地域ではない地域におけるエコツーリズムの展開に対する可能性について述べられているからであり、ツーリスト経験のマネジメントという視点からエコツーリズムが捉えられているからである。21世紀においては、ヘリテージを対象とするツーリズムはすべてエコツーリズムであると主張するアヤラは、ヘリテージの保護と持続可能なツーリズムの相互依存はエコツーリズムにおいて可能になると考える。

エコツーリズムと地域社会との関わりにおいて、自然保護地域ではない地域におけるエコツーリズムの展開は、エコツーリズムが地域社会へもたらす経済波及効果という点において重要である。エコツーリズムをレジャー活動の一形態として、ツーリズム構造のなかで捉える視点から、マス・ツーリズムとの共生関係を目指したエコツーリズムのチャレンジ性が注目される。

注

(1)「世界のどの国でもエコツーリズムは環境保護的な開発の一つの方法であり、社会と経済を発展させる実際的で効果的な方法といえる。そして、地球上にある自然及び文化遺産の保全を行っていくための一番強い手段である」（財団法人日本自然保護協会『NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』（1994年）に収録されている『自然保護』1991.8. No.351より。ページ・ナンバーの記載無し）。

(2) 国際自然保護連合 (IUCN)。

(3) IUCN 国立公園保護地域委員会 (エクトール・セバーリョス ラスクライン) が著した「観光、エコツーリズム、保護地域」には、「ふつうの旅行者とエコツウリストの大きな違い」として、つぎのような表現がみられる。「エコツウリストのすべてが、プロの科学者や芸術家や哲学者である必要はないが、エコツウリズムには、科学的、芸術的、哲学的アプローチが含まれていると考えるべきである。エコツウリズムは自然の中で自然に没頭するような機会を与えてくれ、エコツウリストは、このような旅行を通じて自然と文化に関する知識や認識を身につけ、自分自身を自然保護に関心を持つ人に変えるのである」(財団法人日本自然保護協会『NACS-J エコツウリズム・ガイドライン』(1994年)に収録されている『自然保護』1991.8. No.351 より。ページ・ナンバーの記載無し)。「エコツウリストと伝統的な旅行者と、外見から見分けることは難しいが、彼らの環境に対する関心や態度、行動は根本的に違っている。伝統的な旅行者は、その地域の自然や生態系にはほとんどあるいはまったく関心をはらわないような活動をするためそこ(海岸、湖、森など)へ行くのである。この活動は、自然を目的ではなく手段として『使う』だけである。一方、エコツウリストは、自分自身が自然の中へ引き寄せられ、自然を観察・理解・賞賛するのが大きな関心事であり、野生生物や自然資源を壊さずに利用する」(同上)。

(4) ツアー・オペレーターとエコツアー・オペレーターの区別は、前者がツアー客に対して珍しい場所における体験の機会をつくるだけであり、その土地の人々との交流や自然保護活動に対して関わりをもたないのに対して、エコツアー・オペレーターは、訪問地の自然保護に長期に渡り関わりをもち、地域住民と訪問者との相互理解を助ける、と表現される (Ceballos-Lascuráin 1996)。

ツアー・オペレーターを選別することの重要性は、たとえば、オーストラリア・エコツウリズム協会からのメッセージとして、「あなたが利用しようとしているエコツウリズム・オペレーターは、エコツウリズム協会の設定しているエコツウリズム・オペレーターの実施規定を承認しているでしょうか?」(「オーストラリアのエコツウリズムの現状」)という問いにみられる。このメッセージについては、<http://www.promarkj.com/fraser/austeco.html> (1999. 6.10)による。

(5) 「エコツアーガイドと観光ガイドの違い」は、つぎのように表現される。「いわゆるマストツウリズムの観光ツアーガイドの主な任務がツアーの運行管理と観光地に関する情報の提供、そしてツウリストを楽しませるためのエンターティナーとしての役割であるのに対し、エコツアーの専門ガイドはエコツアーの本質に大きく関わっている」のであり、「従来の観光ガイドがツウリストに知識を与え、効率良く観光地を『見る』ことをアシストするのにに対し、エコツアーガイドはツウリストが五感を総動員して、自然との一体感を感じ、自然の面白さや不思議を発見することをアシストするのである」(社団法人日本旅行業協会 1998:50-51)。

- (6) 「記者の目 エコツアー体験から」『毎日新聞』1993. 2.20 (『NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』日本自然保護協会資料集 第35号, p.108 に収録)。
- (7) エコツアーはつぎのように表現される。「エコツアーの持つ教育的側面とは、理科教育的な知識の切り売りではない。素晴らしい自然環境のもとでの直接的体験を通じてツアーリストの自然や環境に対する正しい認識が芽生え、結果として自然保護の意識や環境意識の向上が期待されるのが、エコツアーの持つ教育的側面である。これには単なる知識の習得ではなくツアーリスト自身の気付きや発見が必要である」(社団法人日本旅行業協会 1998:50-51)。
- (8) エコツーリズムは、たとえばつぎのように表現される。「エコツーリズムは、自然との触れあいを重視したツーリズム形態を選ぶツアーリストの多くが、リゾートに宿泊するようなツアーリストと比較すると、滞在期間が長く、宿泊設備に関しても多くを要求しないなどの傾向がみられる。そのため、プロモート側にとって、エコツーリズムは魅力的なツーリズム形態である。エコツーリズムは、オルタナティブ・ツーリズムや適正観光とその概念において共通性を持ち、『小さいことは美しい』という哲学の追求を通して、とりわけ地域レベルにおいて、多くの利点をもつ。そして、観光産業にとって、エコツーリズムは新たな成長市場であり、地域社会の発展という視点からみれば、収入源として雇用を創出する。さらに、自然保護団体は、エコツアーを主催することによって、自然保護活動の参加者を増やし保護基金の増加が期待できるというように、すべてにとって利点となるツーリズム形態であるとされる」(Norris 1992:32)。
- (9) たとえば、ウィヴァー論文 (Weaver 1999) を参照。近年、エコツーリズムという概念に対する論議は減りつつあるものの、与えられた定義に従ってマーケティングや研究が具体的にどのように行われるべきかという問題は依然として残ることが指摘されている (Blamey 1997:109)。
- (10) ツーリズムと環境保護を結びつける考え方は、すでに1976年にあらわれていることが指摘されている (Fennell 1998, Orams 1995)。
- (11) もとは、研究者や裕福なツアーリスト用の市場であったエコツーリズムが、一般のツアーリスト用市場へと拡大していることが報告されている (Lew 1996)。エコツーリズムの量的拡大については、キャンベル論文 (Campbell 1999) を参照。

文 献

Ayala, H.

- 1996 Resort Ecotourism: A Paradigm for the 21st Century. *Cornell Hotel and Restaurant Administration Quarterly* 37(5):46-53.

Blamey, R.K.

- 1997 Ecotourism: The Search for an Operational Definition. *Journal of Sustainable Tourism* 5(2): 109-130.

Campbell, L. M.

- 1999 Ecotourism in Rural Developing Communities. *Annals of Tourism Research* 26:534-553.

Ceballos-Lascuráin, H.

- 1996 *Tourism, Ecotourism, and Protected Areas*. International Union for Conservation of Nature and Natural Resources.

Fennell, D.A

- 1998 Ecotourism in Canada. *Annals of Tourism Research* 25:231-234.

Lew, A.A.

- 1996 Adventure Travel and Ecotourism in Asia. *Annals of Tourism Research* 23(3):723- 725.

Norris, R.

- 1992 Can Ecotourism Save Natural Areas? *National Parks* 66 :30-34.

Orams, M.B.

- 1995 Towards a More Desirable Form of Ecotourism. *Tourism Management* 16(1):3-8.

Ryan, C. et.al.

- 2000 The Gaze, Spectacle and Ecotourism. *Annals of Tourism Research* 27:148-163.

社団法人日本旅行業協会

- 1998 『エコツーリズムハンドブック エコツーリズム実践のためのガイド』社団法人日本旅行業協会.

Stewart, W.P. and S. Sekartjakrarini

- 1994 Disentangling Ecotourism. *Annals of Tourism Research* 21:840-841.

Weaver, D.B.

- 1999 Magnitude of Ecotourism in Costa Rica and Kenya. *Annals of Tourism Research* 26: 792-816.

World Tourism Organization

- 1992 *Guidelines: Development of National Parks and Protected Areas for Tourism*. Madrid: World Tourism Organization.

財団法人日本自然保護協会

1994 『NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』日本自然保護協会資料集 第35号.

1996 『第2回 PRONATURA エコ・ツアー：スリランカ自然保護研修報告』日本自然保護協会資料集 第38号.

